

家族の力、育てよう

公益社団法人 スコーレ家庭教育振興協会



スコーレフレンズ

No. 24

SCHOLE FRIENDS
Autumn 2024



コミュニケーション
笑顔を作る

INTERVIEW 開発コンサルタント 多田恭子さん

開発コンサルタント
多田恭子さんに聞く

子どもの命を護りたい



多くの幼い命が失われている途上国で「子どもを助けたい」と願った少女は今、アフリカの母子保健の課題に挑んでいます。

いつもニコニコしていれば

多田恭子さんは小学一年生の時に日本を離れ、家族とアメリカ東部のニュージャージー州で暮らすことになりました。平日は現地校で、土曜日は日本語補習授業校(補習校)で学びます。

「父の海外赴任で、いきなり現地の小学校に放り込まれた私は、日本人と違う肌・髪・目の色の人たちに初めて出会って驚

き、怖いと感じました。ABCもわからず、モヤモヤして『学校に行きたくない』と言った私に、母は『とりあえずニコニコしていれば、きっと誰かが助けてくれるから』と。私は頑張っ
て学校に通い、いつも笑顔でいるようになっていました」

学年を重ね、英会話にも馴染んだ頃、補習校の社会科学見学でニューヨークの国連本部を訪れたことが多田さんの転機になったのです。

「国連のユニセフ(国連児童基金)のレクチャーで、『世界では五歳未満の子どもが三秒に一人亡くなっている』ことを知りました。大きな衝撃でした。その時、純粋に『子どもを助きたい』

と思ったんです。『途上国で子どもの命を護るために働きたい』と考えるようになりました」

小学六年生の途中で日本に戻った多田さんは、「帰国子女」の枠で括られ、「個」ではなく「和」を重視する友だちとの関係に困惑することに。それでも、「子どもの命を護りたい」という想いは揺らぎませんでした。

「子どもを助けるのは医者の仕事だ」と思い込んでいた私は、周囲に『医者を目指す』と宣言して、高校時代は受験勉強に邁進しました。でも、
国立大学の医学部

には合格できず、過酷な受験勉強を続けることを心配した母に浪人することを止められて……併願していた慶應義塾大学の看護医療学部に入ったんです」

（看護師としてできることを）

入学から半年過ぎても挫折感が払拭できなかった多田さんは、国際的な医療活動に詳しい教員



多田さんの“タンザニア推し”の一つ、色彩豊かな「ティンガティンガ」(後方の絵画)は、さまざまな野生動物が暮らす大自然に育まれた独自の現代アート。

に葛藤を打ち明けました。

「先生に、子どもを助ける仕事には、いろいろなアプローチがあるのに、『医者だけにこだわるのはなぜ?』と聞かれ、ハツとしました。母が浪人すること、を反対した時にも、『看護師も人を助けられる仕事でしょう』と言われていましたから。それから、将来、途上国の保健医療を支援するためには、看護師としてどんな働き方ができるのか、これから自分は何を学べばいいのかということ真剣に考えるようになりました」

タンザニアのフラハ(ハッピー)

夏休みには、英国、豪州、ラオスなどへのスタディツアーに



青年海外協力隊員として派遣されたタンザニアのムヒンビリ国立病院の小児病棟で。

参加し、積極的に世界の医療に触れてモチベーションを保ち続けた多田さん。看護師と保健師の資格を取得し、卒業後、慶應義塾大学病院に就職しました。

「国際看護に必要な修士号を取ろうと考え、実践経験を積みながら資金を貯めるため、小児科の看護師になりました。三年が過ぎて、次の進路を検討してい

た時、聖路加国際大学大学院とJICA青年海外協力隊の連携プログラムの開講を知って、『これだ!』と。二度とないチャンスかもしれないと思い、必死の勉強で合格。二〇一五年に三年制の大学院に入学後、協力隊の選考にも合格して、母子保健支援ボランティアとしてタンザニアに派遣されました」

初めてのアフリカ、未知のタンザニアで二年近く暮らし、多くの子どもたちの命と向き合った多田さんは、「国際保健分野の専門家」を目指すことを決意。大学院の修業年限を一年延長して助産師資格を取得し、再びタンザニアに赴くための準備を進めました。

笑顔になれば社会が広がる



協力隊の任期中、両親と一緒にタンザニアを訪れた姉は、趣味の一眼レフで大自然を撮影。これまで、姉の写真と妹(恭子さん)のトークによる姉妹展を2度開催。今年1月の姉妹展では、参加者に文房具の寄付を募り、恭子さんがタンザニアの孤児院に届けた。

「配属先の国立病院で、タンザニアの子どもの栄養失調を調査し、母乳育児の問題に着目しましたが、より深い調査・研究には助産師の知識が必要だと感じて、もう一年大学院で学ぶこと

を決めました。

途上国の厳しい現実や、協力隊どころか「協力され隊」のような自分の未熟さに、何度も悔しさを感じてしまつて。でも、タンザニアの人たちは、いつも

笑つていた私を、スワヒリ語で『フラハ(幸福、喜び)』と呼んで、大らかに受け入れて支え、たくさんのことを教えてくれました。任期を終えて帰国する時、いつかタンザニアの人たちに恩返しができるように、もっと貢献で

きる力をつけて、必ず戻ってくることを心に誓つたわけです」

産科病棟での約三年の勤務を経て、開発コンサルタントに転職した多田さんは今、JICAのプロジェクトを担当。「子どもを助きたい」を原点到、タンザニアの母子保健の課題に取り組んでいます。

多田恭子 ● ただ・きょうこ

1988年東京生まれ。小学1年から5年間を米国で過ごす。2011年慶應義塾大学看護医療学部卒業後、看護師として同大学病院小児科に勤務。2015年聖路加国際大学大学院看護学研究科修士課程ウイメンズヘルス・助産学専攻上級実践コース入学。後にタンザニア連合共和国母子保健支援ボランティア連携事業により青年海外協力隊員としてタンザニアに赴任。2019年に助産師資格を取得。2022年(株)フジタプランニングに転職し、開発コンサルタントとしてJICAのタンザニア母子保健サービスの質向上プロジェクトに従事。



子育ての中で大切なことを学ぶ “より良く生きる”ための学習と実践を続けて

スコール協会は長野県の各地で家庭教育講座やセミナーを行なっています。7月上旬、松本・塩尻地区では、6月下旬に開催した講座の初参加者のためにフォローアップセミナーを実施。毎月開催するオンラインセミナーも活用して、県内を網羅した丁寧な活動を続けています。

全国で4番目に面積が広く、南北に長い長野県では、「長野・須坂」「千曲」「上田」「佐久・小諸」「松本・塩尻」「伊那」の各地区に実行委員会を設けて、家庭教育セミナーなどを開催しています。長野地区（スクール）代表の手塚よし子さんは、長年にわたって、県内の各地区に赴き、セミナーの講師を務めてきました。

「時代の変化はあまりにも早く、生き方も多様化している中で、親自身が不安になって、ますます子育てに余裕を持てなくなっています。それぞれの困りごとや悩みを一人で抱え込まず、スコールの仲間と一緒に、

子どもにとって本当に必要なこと、家庭で今できることを考えながら、『子育ての大切なポイントを学んでいきましょう』と広く呼びかけながら活動を行なってきました」

初めて参加した講座やセミナーが“きづき”のきっかけになってスコールで学び始め、自身の子育て期がひと息ついてからも長く学び続ける会員が多数います。地区責任者や講師、トレーナーとして、手塚さんとともに活躍する後進も育っています。

「家庭の日常生活の中から、子どもは心と



右：以前は毎月、普及活動をして各地区でセミナーの講師を務めてきた手塚さん。左：7月上旬に松本・塩尻地区で実施したフォローアップセミナーの講師を務めた松井みつえさんは長野北地区責任者。



フォローアップセミナーは心と体をほぐすアイスブレイク(てあそびうた「あんぱん食ばん」)で楽しくスタート。

体の栄養をもらって、これからの時代を生きるための力を育てていきます。スコーレの学習と実践を続けて、まず親が良い生活習慣を身に付け、毎日の子育ての中から本当に大切にしたいことを学んでいくと、やがて家族の関係も家庭も明るく変わってきます。長く学ぶほど、より良く生きるための生涯学習の素晴らしさを実感できるスコーレの活動を、もっと多くの人に体験してもらいたい、人生百年時代だからこそ、より幅広い世代にスコーレの学びを広げていきたいと思っています」

長野地区では、早くからオンラインも活用しながら、積極的に広い地域をカバーして、各地区の一人ひとりの事例にしつかりと耳を傾け、きめ細かな対応を行なってきました。7月下旬には、佐久・小諸地区の早朝研修会場も開設され、これからのより充実した活動が期待されています。

スコーレの活動

- ▼家庭教育講座、家庭教育セミナー……活力ある子どもを育て、親としての生き方を学びます。
- ▼ふれあいトレーニング……ストレッチ・ゲームを通じて、ふれあいの心地よさを感じる楽しいトレーニングです。
- ▼心身開発トレーニング……腹式呼吸による発声を主体としたトレーニングで心身を活性化します。積極的に行動できるものになります。
- ▼『スタート』学習……アプリのテキストを使って、日常生活や家族とのふれあいの中から、小さな幸せを見つける学習ができ、成長します。
- ▼『ステップ・UP』学習……学習の習慣化と生活テーマの実践を図るためのプログラムです。あいさつ、返事、早寝早起きをテーマに取り組みます。
- ▼早朝研修……全国各地の会場で腹式呼吸や朗読、体験発表などを行ないます。早寝早起きのライフスタイルが身につきます。
- ▼ボランティア活動……日常生活で行なえる収集ボランティア(ペルマーク・未使用「書き損じ」はがき・使用済み切手)やユニセフ「ハンド・イン・ハンド」の街頭募金に取り組んでいます。
- ▼生活カウンセリング……不登校、イジメ、嫁姑・夫婦の問題などカウンセラーからの確かなアドバイスが受けられます。

お菓子を勝手に与える義父母

Q 同居している義父母が「孫が欲しいから」と、3歳の娘にお菓子を勝手に与えます。ときには夜9時すぎに、一緒に食べることもあります。



義父母と上手につきあおう

お嬢さんの健康なからだを育てるために、食事はとても大切です。しかし、子どもにはからだの栄養だけでなく、心の栄養も大事です。

一般的に、お母さんは子どもの「未来」の幸せを考えます。一方、祖父母は孫の「今」の望みを叶えようとするものです。

そして子どもには、このどちらも必要なのです。

一番よくないパターンは、お嬢さんへのお菓子の与え方をめぐって、同居しているあなたと義父母さんが仲たがいすることです。

大切なのは、人生の先輩である義父母さんと上手につきあうことです。あなたの理想は少し横に置いて、「うれしいね。おいしいね」と、義父母やお嬢さんの気持ちに共感して、よい関係をつくることです。

そのうえで、義父母さんにはもう少し早い時間に食べるようにお願いしたり、あなたから美味しいお菓子を差し入れするのもよいでしょう。

